

《^{せいしょ}聖書》マタイによる福音書 5:1-12a

「^{さいわ}幸い」について語る時、まず^{かんが}考えられるのはマタイによる福音書の山上の説教(5章~7章)の中の言葉です。ここでは「^{さいわ}貧しい人々は、^{さいわ}幸いである」(ルカ6:20)という言葉の代わりに、「^{こころ}心の^{さいわ}貧しい人々は、^{さいわ}幸いである」という言葉が伝えられています。このような言葉から考えられる事は、ここで幸いといわれているのが、^{かねも}金持ちとか^{さいわ}貧しい人とかを問わず、^{りんりてき}倫理的な意味で^{けんそん}謙遜な人を指しているのだという事です。だから、「^う今^{ひとびと}飢えている人々は、^{さいわ}幸いである」(ルカ6:21)という代わりに、「^ぎ義に^う飢え^{かわ}渴く人々は、^{さいわ}幸いである」とも伝えられています。

私たちはこのような二つの違った伝承をどのよに受け止めていけばよいのでしょうか。私たちが四つの福音書を持っているのは、それぞれイエスの言葉と行いについての伝承と同時に、それぞれの福音書記者が強調したかった内容を含んでいるという事です。イエスの言葉は死んでしまったものではなく、それぞれの場に応じて語り伝えられていったものです。ですから、私たちがそれぞれが伝えられていった弟子たちや教会の状態についても配慮していく必要があるのです。

ここで^{わたし}私たちが^み見なければいけないのはイエスの^{こうどう}行動です。イエスはしいたげられた者とともに^{せいかつ}生活しています。これは明らかに^{きょうやくせいしょ}旧約聖書の^{おし}教えとは違っています。貧しい者に^{ほどこ}施しをしたり、^{たす}助けたりする人が^{さいわ}幸いとされていたのであって、^{さいわ}貧しい人や^{つみびと}罪人と^{しょくじ}食事をともにする事は求められていませんでした。むしろ、さけるべき事とされていました。

「^{さいわ}貧しい人々は、^{さいわ}幸いである」という言葉を、イエスの行動に照らしてみるとどうなるでしょうか。イエスを受け入れていった人は、^と富んでいる人や^{ちから}力のある人ではなく、まさに^{さいわ}貧しい人や^{くる}苦しんでいる人たちでした。イエスによって、初めて一人前の人間として認められたのです。イエスは当時の律法によって作られていた差別を取りのぞかれたのです。ですから、この言葉を、^{いま}今ある^{くる}苦しみをがまんしていれば、^{あつ}死んだ後に^{ひく}きつと報われるから今の状態に耐えなさいという意味でとらえない方がよいでしょう。これこそ、^{しゅうきょう}宗教が^{あへん}阿片として^{ひはん}批判された^{せいしん}精神です。

一方で富んでいる人がおり、他方で^{さいわ}貧しい人がいる事にイエスはがまんできなかったのです。そうした^{せいど}制度を支えている人たちに^{せい}批判を込めて言われた言葉なのです。